

# 【2020年 乳汁検査まとめ I】

## はじめに

2020年の1年間に弊社で行った乳汁検査についてまとめましたので報告します。

まず本記事にて使用している菌種や薬剤の略語等を以下に示します。

### 菌種

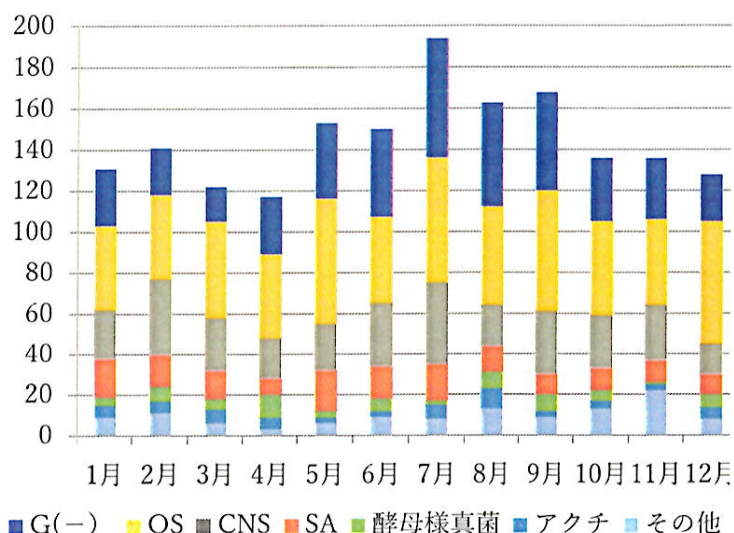
G(-) 菌	大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌含む
大腸菌群	大腸菌、その他の大腸菌群
OS	環境性レンサ球菌
SA	ブドウ球菌
CNS	環境性ブドウ球菌

### 薬剤

略語	注射	軟膏
AM	アンピシリン	—
Cz	セファゾリン	セファゾリン セファメジン
ERFX	バイトリル 10%	—
K	カナマイシン	タイニーPK
P	ペニシリン	ニューサルマイ
PLM	—	ピルスー
ST	トリオプリン	—
T	OTC 注	OTC 軟膏

## 月別乳房炎検査数

2020年の月別乳房炎発生数をグラフで以下に示します。5月～9月の気温が高い時には比例して乳房炎検査数が増加していることが分かります。



グラフ 1 月別乳房炎発生数

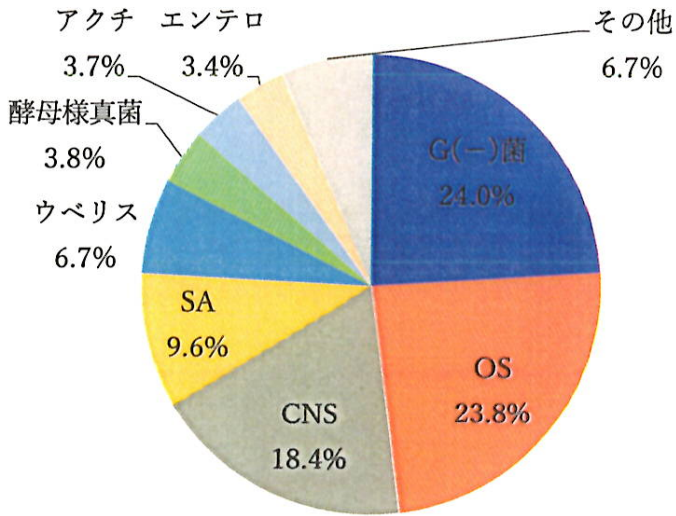
G(-)：大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌を含む  
 OS：OS、ウベリス、エンテロコッカスを含む  
 その他：上記以外の微生物及び雑菌を含む

## 原因微生物割合

2020年1月～12月の検査頭数は1770頭、検査分房数は3544分房でした（どちらも重複含む）。2020年の検査数は、2019年の検査頭数1610頭、検査分房数3266分房と比べると増加しています。全検査分房数のうち原因微生物が検出されたのは1736分房でした。この1736分房で検出された原因微生物の割合を以下に示します。



Total Herd Management Service



グラフ2 原因微生物割合

G(-)菌：大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌含む

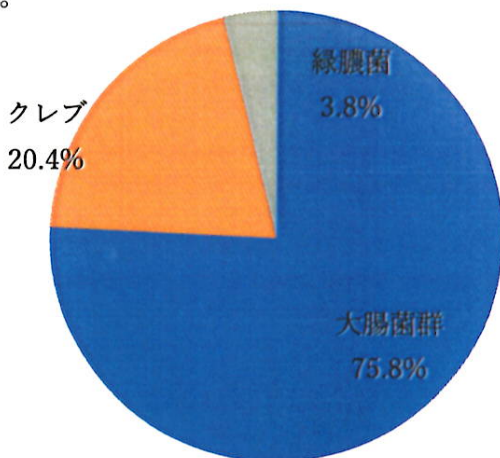
その他：グラフ上の原因微生物以外の微生物及び雑菌含む

アルカノバクテリウムをアクチ、エンテロコッカスをエンテロと表記

最多はG(-)菌（大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌）の417検体、24.0%で、次いでOS 414検体、23.8%、CNS 320検体、18.4%、SA 166検体、9.6%、ウベリス 116検体、16.7%、酵母様真菌 66検体 3.8%、アルカノバクテリウム 64検体、3.7%、エンテロコッカス 59検体 3.4%でした。

2019年度の結果ではG(-)菌（大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌）が24.5%、OSが22.8%、CNS18.7%、SA9.1%でしたので検出された原因微生物割合は同程度です。

その他に含まれるプロトセカやコリネバクテリウム等の割合も2019年と2020年では同程度でした。



グラフ3 G(-)菌種割合

クレブシエラをクレブと表記

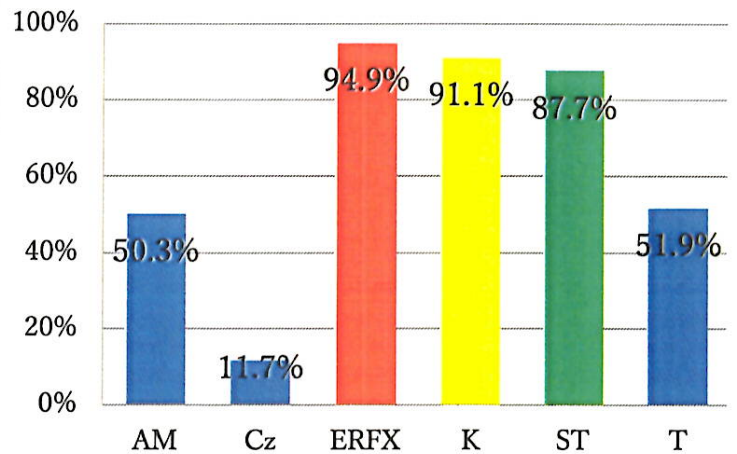
大腸菌群には大腸菌、その他の大腸菌群を含む

G(-)菌では大腸菌群が75.8%で、クレブシエラは20.4%、緑膿菌は3.8%でした。

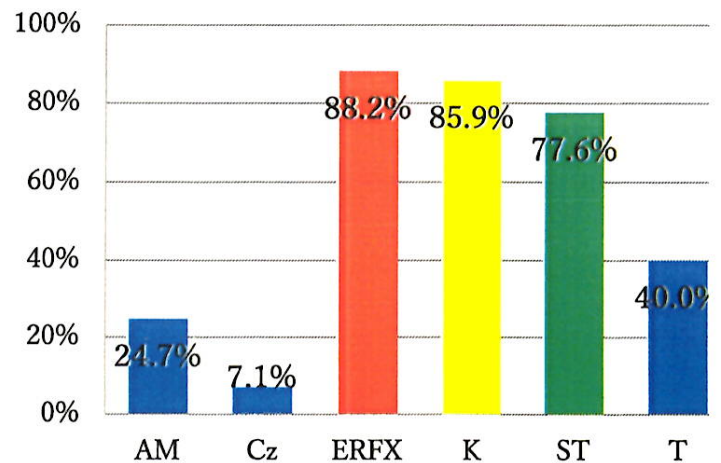
### 感受性割合

大腸菌群、クレブシエラ、緑膿菌の感受性割合を以下に示します。

感受性割合が高い順にグラフが赤、黄、緑、それ以下は青で示しています。



グラフ4 大腸菌群感受性割合



Total Herd Management Service

## グラフ5 クレブシエラ感受性割合

緑膿菌は検出された16検体のうち、10検体でERFXのみ感受性があり、残りの6検体は感受性薬剤なしでした。

大腸菌群、クレブシエラ共にERFXの感受性が最も高く、それぞれ94.9%、88.2%となりました。次いでK、STと続きます。ERFX、K、STにおいて、クレブシエラは大腸菌群よりも約5~10%低い結果となりました。AM、Cz、Tについても大腸菌群よりもクレブシエラで低い結果となりました。大腸菌群のAMについては2019年の38.0%から50.3%に、Tについては39.5%から51.9%に増加しています。残りのAM、Czについては変化なしです。

### 最後に

2019年のデータと比べて大腸菌群に対するTの感受性割合は上昇しました。大腸菌に対してOTCが効かないことを理由に、OTCの使用が減少したことが要因なのか、別の理由かは不明です。しかし、大腸菌に対するTの感受性割合は依然高くはありません。個人的には、全身症状を呈する大腸菌性乳房炎に対して初診から（感受性薬剤がまだ判明していない段階）OTCを選択するには、この感受性割合は依然低いものだと感じました。

来月は残りのSA、CNS、OS等について紹介します

富田



Total Herd Management Service